

『更級日記』東海上洛の記の時間構造について

伊 藤 守 幸

一

『更級日記』冒頭の東海上洛の記は、その成立過程に色々と問題を含む文章である。たとえば、四十年余りの時間を内包する『更級日記』にあつて、僅か三カ月の旅行記にすぎないものが、記事量としては作品全体の二割を占めるといふ、極端な不均衡の問題。あるいは、作品の成立時から四十年以上も遡る遠い過去の出来事が、きわめて詳細かつ具体的に描き出されていることの不思議さ。——そうした点については、これまでも議論が重ねられており、上洛の記の原型となる文章が早い時点で成立していたことが推断されている。物証に基づかない議論ではあるが、上洛の記の内容を勘案するとき、何らかの覚書のような文章の存在は、当然予想されるところである。ただし、仮に覚書の文章が存在したのだとしても、現在我々の目にする上洛の記の最終的な形態その文体や記事構成等）が、基本的に『更級日記』執筆時の作者によって統括されていることは言うまでもない。

『更級日記』が最終的にまとめられたのは、寛仁四年（一〇二〇年）の上洛の旅から数えて四十年余りも後のことと考えられるから（『更級日記』の正確な成立年次は不明だが、記事内容から、康平三年（一〇六〇年）以降の成立と推断される）、執筆時の作者の作品構成に対する配慮が、上洛の記の表現にどのような影響を与えているのかという問題は、当然慎重な考察の対象とされなければならない。ただし、その場合、上洛の記が構造的に内包する二重性（執筆時と経験時の時間的懸隔に起因する二重性）を、過去経験時）と現在（執筆時）のどちらの側から捉え直し、意味づけてゆくかということは、実はかなり厄介な問題を孕んでいるのである。

ある作品を論じて作者の意図を問題にする場合、その意図とは、執筆時におけるそれを指す場合が一般的であろう。しかし、自己言及性を特質とする自伝作品の場合、とりわけ『更級日記』のように長大な時間を内包する作品の場合、そもそも「語る作者」と「語られる作者（記述された人生）」との関係を、単純に自己同一的な

ものとして捉えてよいのかという点に、問題が内在するのである。自伝とは、自己を他者として再発見する場でもあり得るからだ。執筆意図や作品形成の方法を問題にすることは、純粋な虚構を対象とする場合には、作品へのアプローチの仕方として一定の有効性を持ち得るだろうが、自伝作品を相手にする場合は、「語る作者」と「語られる作者」との関係それ自体を、より高次の分析対象として常に視野に入れておかなければ、執筆意図へのこだわりが、かえって作品理解の幅を狭めたり、歪めたりする結果にもつながりかねないのである。

本稿は、上洛の記の具体的表現に着目しながら、『更級日記』の時間構造の多層性を明らかにすることを目指すものであるが、その際、問題の所在を明確にするためにも、上洛の旅のさなかに身を置く十三歳の作者のありようと、執筆時の作者の創作的意図との関係については、できるだけ正確に見定めてゆきたい。

さて、右のような点に留意しながら上洛の記を読み進めるとき、とりわけ興味深く思われるのは、この長大な旅行記の内部に、執筆時の作者の視点を直接的に反映する述懐がほとんど見当たらないことである。そのため、上洛の記を読み進める読者は、十三歳の少女の目を通して、ほとんど彼女とまなざしを共有したまま、この上洛の旅を追体験することになるのである。もちろん、先にも述べたように、仮に上洛の記が覚書や歌稿のようなものを利用して書かれたのだとしても、それは、この文章が執筆時の作者による統制を免れていることを意味するわけではない。記事構成や表現にかかわる工夫の跡は、随所に見いだされるのであ

る。しかし、作品の最終形態が執筆時の作者によって決定されるという自明の前提はそれとして、上洛の記の表現に関して最も特徴的なことは、上洛後の記事群に頻出する草子地的述懐（かつての自身の言動に対する、語り手による自己言及。概ね批判的言説である）が、この長大な旅行記からは、みごとに消去されているという点である。回想的筆致が介入すれば、読者は、どうしても執筆時の作者を意識させられることになるが、その種の記述を排除することによって、『更級日記』は、十三歳の少女を視点人物とする旅の記録という、千年の文学史を見渡しても際立つて特異な旅行記を生み出すことに成功したのである。

ところで、上洛の記の特異性は、少女の旅が描かれているという点のみに限られるわけではない。むしろ上洛の記で興味深いのは、執筆時の意識を反映する述懐が排除されているにもかかわらず、そこに描かれた少女のまなざしそのものが、そのまま晩年の作者のまなざしと重なるように見える瞬間が存在するという点である。もちろん、こうした記述のありようにも、執筆時の作者の意識が反映されていると見ることはできる。しかし、この特異な表現には、それだけでは片付かない問題も内包されているのであるまいか。

こうした問題については、別の機会に足柄山の遊女に関する記事を取り上げて論じたことがある。そこでは、上洛の旅の途次、足柄山で偶然出会った遊女達の姿に、孝標女が深い関心を寄せていることの象徴的意味について考察してみた。

足柄山の記事とは、概ね次のようなものである。

足柄山といふは、四五日かねておそろしげに暗がりわたれり。



(中略) 麓に宿りたるに、月もなく暗き夜の、闇にまどふやうなるに、遊女三人、いづくよりともなく出で来たり。五十ばかりなる一人、二十ばかりなる、十四五なるとあり。庵の前にからかさをささせて据ゑたり。をのことも、火をともして見れば、昔、こはたと言ひけむが孫といふ、髪いと長く、額いとよくかりて、色白くきたなげなくて、「さてもありぬべき下仕へなどにもありぬべし」など、人々あはれがるに、声すべて似るものなく、空に澄みのぼりてめでたく歌をうたふ。(中略) 見る目のいときたなげなきに、声さへ似るものなかつたひて、さばかりおそろしげなる山中に立ちてゆくを、人々あかず思ひてみな泣くを、幼なき心地には、ましてこのやどりを立たむことさへあかずおぼゆ。

この記事に認められる象徴性とは、『更級日記』の総体としてのありようと深くかわるものである。すなわち、多くの旅行記を内包する『更級日記』は、旅の記としての側面をも有しており、作品のそうしたありようからは、人生を旅の相の下に捉え直そうとする作者の姿勢が窺われるのである。そのような作品理解に基づいて捉え直すとき、『更級日記』を書き進める孝標女が、四十年以上も昔の遊女達との一夜の遭遇について、迫真の筆致で克明に再現し得ていることの意味を、軽々に見過ごすわけにゆかないのは当然である。なぜなら、遊女とは、正しく旅としての人生を生きる存在だからである。

他の同時代の女流作品には登場することの少ない遊女という存在に対して、十三歳の孝標女が共感に満ちたまなざしを向けていることの意味をそのように理解するとき、老残孤独の闇の中で人

生行路を振り返りつつ『更級日記』の筆を進める作者と、旅する遊女達を包み込む足柄山の深い闇に目を凝らす少女とは、数十年の時を隔てて、実は同じものを見据えているのではないかとさえ考えられるのである。『更級日記』全編を通じて多くの旅行記を書き届める孝標女が、それらの記事の中で、三箇所にとわたりて遊女の姿を点描していることなども、こうした見方を裏づける一証左と言えよう。

さて、遊女の記事をめぐる右の論考においては、なぜ十三歳の孝標女が、遊女達の姿や言動をこれほど克明に記憶にとどめ得たのかと問うことによつて、出来事そのものの意味を経験時の少女の心理に即して明らかにするとともに、『更級日記』の全体的ありよう(その紀行文的性格)を考慮することによつて、執筆時の作者が出来事の意味についてどのように自覚的であつたのかという点もまた、問い直されたのである。以下、本稿では、上洛の記における作者の詠歌場面に着目しながら、右のような二重性について、更に考察を深めることにしたい。

二

次に引用する場面は、作中で作者が初めて歌を詠む場面であるが、同時にそれは、『更級日記』における和歌の初出記事ともなっている。

昔、下総の国に、まのてうといふ人住みけり。疋布を千むら万むら織らせ、晒させけるが家の跡とて、深き川を舟にて渡る。昔の門の柱のまだ残りたるとて、大きな柱、川の中

に四つ立てり。人々歌よむを聞きて、心のうちに、

朽ちもせぬこの川柱残らずは昔の跡をいかで知らまし

このような歌が『更級日記』の第一番目の歌として据えられていることには、どのような意味が認められるのだろうか。この点に関しては、すでに三角洋一が、次のような指摘を行なっている。

……いま日記の執筆にとりかかったばかりの孝標女は、まののてう「の長者伝説とその遺跡にふれての感慨を詠んだ歌に、さらなる新たな思いとして、この日記が後の世の読者が彼女をしのぶよすがとなってくればよいという祈りを籠めたと見たいのである。もし彼女にこのような思い入れがあつたと認めてよいのならば、そこからはすでに歌人としてか、物語作者としてか、ともかく文学にたずさわってきた経歴をもち、いまあらためて自伝を綴ろうとしているその横顔が浮かんでくるような気がするが、いかがであろうか。よしこの見方は別にしても、少なくとも、歌にはそれがすえられた位置とか前後の散文の文脈によつては、また新たな陰翳の生じることがあるとは言いえよう。³⁾

最初の和歌を記し留める作者の思いが如何なるものだったのかという問いは、もとより想像の範疇に属する事柄ではないが、このように遠い過去を志向する歌が、言葉による過去の再構築を進める自伝作品の中に最初の歌として置かれているという事実の有する象徴性は、確かに注目し値すると言えよう。和歌の据えられた位置や前後の散文の文脈によつて、作中におけるその和歌の意味に「新たな陰翳の生じることがある」という指摘も、穏当なものである。ただし、この論文では、右の引用の前の部分で、こ

の和歌に関して、「十三歳の彼女がこの場で詠んだ歌そのままの掲出が、日記の筆を執る現在、当時の歌を手直しするなり、新たに詠み出してここに挿入するなりした歌が、いまは問うまい」と、きわめて婉曲な言い回ししながら、日記作品の虚構性にまつわる、微妙で厄介な問題に触れた発言もなされているのである。日記をまとめるに当たつて、過去の詠作に修正を施すことと、「新たに詠み出し」た歌を作中に「挿入する」こととの間には、「日記」の概念そのものにもかかわる重大な径庭が存すると思われるが、三角論文は、和歌創作の可能性を婉曲に示唆するのみで、この件に関して、それ以上に踏み込んだ議論が展開されることはない。論証しようにも、作者以外には知る術もない事実については、証明の方法もないというのが実情ではあるうが⁴⁾。

いずれにしても、日記や私家集の歌が、多くの場合、手控えの歌稿等に基づいてまとめられていることは、動かせない事実である（表現の「手直し」や和歌配列の工夫は、当然有り得るとしても）。その種の歌稿の存在は、多くの日記や私家集の記述の中に確認することができるし、勅撰集の撰進にあたつて、しばしばそれらの歌稿が利用されているのも、よく知られた事実である。『更級日記』中のある歌が、そうした原則と異なつて、執筆時に創作されたものであると言つたためには、決定的な証明は不可能としても、表現構造や日記創作の実情に即した緻密な論証が不可欠であることは言つてもいい。

この問題に関して、本稿は、『更級日記』の和歌を、原則として経験時に詠まれたものとする立場を採る。その論拠は、いくつか挙げられるが、上洛の記に限って考えた場合、まず、この旅行記

記の執筆にあたつて、孝標女が、自身の経験時の記憶を大切にしている点が注目される。たとえば、都人にもその名をよく知られる「隅田川」について、「あすだ川」という個人的記憶に基づく呼称にこだわっていることもそうだし、上洛の道順に関する地理的錯誤の存在も、自身の記憶に対するこだわりの強さから生じたものと見る事ができる（隅田川の場合など、『伊勢物語』を繙けば、難なく回避されたはずの錯誤である）。更に、より根本的な問題として、作中における上洛の記の自律性について、どのように捉えるべきかという問題がある。執筆時の意識を直接反映する和歌を創作して、上洛の記の中にはさみ込むことまでするくらいなら、どうして上洛の記そのものを、作品全体の中により整合的な形で位置づけようとしなかったのかと、問いたくもなるのである。

先にも述べたように、本稿も、上洛の記は基本的に作者の創作的意識の統制下にあると考えるものである。ただし、その創作的努力は、専ら上洛の記を自律的世界として作り上げることに傾注されていたと捉えるべきであろう。この点については、別稿を用意して更に詳しく考察する予定であり、今は要点のみを述べることにするが、孝標女は、上洛の記の執筆を通じて、「再び見いだされた時」としての少女時代の旅の再現に意を用いていたのであり、それによつて、『土佐日記』ともまったくスタイルの異なる、前例のない紀行文を生み出そうとしたのである。そうした試みに際して、執筆時の作者のことを読者に意識させるような歌を、わざわざ創作してまではさみ込む必要があったのだろうか。この場面は、やはり実際の記憶と詠作に基づいた記述であり、ここでの和歌は、

経験時の心情を直接的な形で再現する手段として機能していると捉えるべきではないか。そのように考えるならば、「まのてう」の屋敷跡の場面で問われるべきは、執筆時の作者の意図よりも、このような廃墟の光景を記憶にとどめ、このような歌を詠んだ、十三歳の少女のまなざしの意味ということになる。

ところで、右の場面の直後には、作者の歌がもう一首記されている。「まのてう」の栄華の跡を詠んだ先の歌に引き続いて、「くろとの浜」の風景を詠んだ次の歌を目にすると、読者の感慨は一層複雑なものとなりまざるはずである。

その夜は、くろとの浜といふ所にとまる。片つ方はひろ山なる所の、砂子はるばると白きに、松原しげりて、月いみじう明かきに、風の音もいみじう心ぼそし。人々をかしがりて歌よみなどするに、

まどろまじ今宵ならではいつか見むくろとの浜の秋の夜の月旅の途中で目に触れる一期一会の風景の貴重さをいとおしむ思いのこめられた歌である。眼前の光景に対する愛惜の思いを伝えるこの歌は、現在の瞬間に対する切実な愛着を示しているわけだが、同時にこの歌は、「今宵ならではいつか見む」という表現において、その「現在」を遠くから俯瞰するまなざしも覗かせているのである。なぜなら、この表現は、東路を旅する機会が生涯を通じて二度と得られないかもしれないという予測を前提として成り立つものだからである（この予測は、当時のこととしてはきわめて蓋然性の高いものであり、現に孝標女は、『更級日記』の執筆に至るまで、その後再び東路を訪ねる機会を持たない）。

このようなまなざしの二重性は、もともと『更級日記』の執筆行為に内在するものである。そうした二重性が、ここでは十三歳の少女の歌の内部に認められるのである。自伝の執筆に多元的視点が必要とされることは誰もが認めるとしても、十三歳の少女がこのような歌を詠んでいることには、あるいは違和感を覚える読者もあるかもしれない（先の「川柱」の歌を執筆時の創作と考える読者は、この歌も同様に見なすのだろうか）。しかし、これら一連の作者の歌は、少なくとも上洛の記の内部において、読者に文脈上の違和感を覚えさせるようなものではない。

たとえば、上洛の旅を通じて孝標女が地方の伝承や昔語りに興味を示していることは、「まのてつ」の伝承のみならず、竹芝伝説や富士川伝説を書き留めていることから明らかである。そのように昔語りを熱心に筆録する少女が、「昔の跡」を偲ぶ歌を詠んだところで何の不思議もないのである。こうした古伝承に対する関心は、十三歳という年齢には不似合いな老成ぶりを示すものと受け取られるかもしれないが、作品冒頭に上総在住時代のこととしてまず記されるのが、物語への強い憧憬であることを勘案するとき、少女時代の性癖のあらわれとして、そこに一貫するものを認めることもできるのである（上洛の記に筆録された伝承の内容を問題にするときには、それらの伝承への関心を、『源氏物語』をはじめとする雅びな物語への憧憬と一括するには論じ難い面もあるのだが）。

また、孝標女の精神的成熟度について付言するならば、彼女は、この旅の数カ月後には『源氏物語』を全巻読破し、法華経第五巻を習えという夢告まで得るような早熟な文学少女だったのであ

る。『更級日記』から窺われるそうした少女時代の孝標女の気質と、彼女が上洛の旅の途上で詠んだ歌の内容とは、何ら抵触するものではない。

以上のような点を考慮するとき、これらの歌に文脈上の違和感は認められないということになるが、それにしても、人生の旅立ちにあたって、頻りに昔語りに心を奪われたり、あるいは過ぎ行く時に対する愛惜の思いにとらわれたりするというのは、いささか屈折した心理を窺わせる事態ではある。上洛の記に書き留められたそうした微妙な心の動きからは、どのような作品論的意味が読み取られるのだろうか。

『更級日記』の起筆部において、上洛の旅は「物語を求める旅」として位置づけられている。もちろん、傍から見れば、それは上総介菅原孝標の帰任の旅にすぎないのだが、当時の孝標女にとって、都とは何よりも様々な物語の舞台であり、また多くの物語の流通する空間でもあった。そんな憧れの都（物語）を目指す旅は、自伝作品の冒頭に配置されることによって、人生の開幕を告げる旅としての意味をも担うことになる。すなわち、この上洛の旅は、作中において、明確に未来を志向する旅として意味づけられているはずである。しかし、実際の上洛の記の内部では、右に見たように頻りに過去の事がかえりみられているのである。上洛の旅の果てには都での新しい生活が待つというのに、その未来へ向けて、孝標女は、まるで後ずさるように歩を進めるのである。こうした記事構成の仕方は、作中における時間の取り扱い方に関して、『更級日記』が相当地に複雑な構造を内包する作品であることを窺わせ

るものである。

ここで詳しく論じることはいできないが、作品の内包する時間構造の複雑さという点に言え、『源氏物語』と『更級日記』は、当代文学の中でも双璧をなすと思われる。もちろん、多くの登場人物と三世代にわたる長大な時間を内包する『源氏物語』を、『更級日記』と并列に論じるわけにはゆかないし、時間処理の仕方という点で、『更級日記』が『源氏物語』から多くを学んでいることも明らかである。しかし、たとえば「まのてう」の伝承に関する記事を読み、そこに記された作者の歌の意味について考えるとき、日記文学の基盤をなす回想の方法こそが、回帰的時間構造を浮かび上がらせるのに有効な方法であることに気づかされるし、そこには『源氏物語』のありようともまた異なる、『更級日記』の特異な性格も認められるのである。

あらゆる文学技法を駆使する『源氏物語』は、日記文学的回想の方法をも巧みに利用しているが、物語において回想の方法を有効に活用するためには、当然のことながら物語の内部に相当の時間の積み重ねが必要とされる（たとえば、若菜巻以降、『源氏物語』の筆致に回想的傾向が強まることに關しては、三田村雅子の指摘がある）。さすがの『源氏物語』にも、人生の出发点において、あたかも終末を見届けるかのように、昔の長者の栄華の跡を歌に詠む少女など存在し得ないのである。

「朽ちもせぬこの川柱残らずは昔の跡をいかで知らまし」——川の中に立つ四本の柱とは、さながら遠く過ぎ去った時の形見である。そんな時の形見に心動かされて歌を詠む少女の姿は、あたかも、過ぎゆく人生の形見として『更級日記』を書き進める作者

の似姿のようでもある。この一見奇妙に見える事態を、執筆時の作者の側に引き寄せて理解しようとすれば、和歌そのものを創作と見なすような解釈にまで行き着くことは、先に確認した通りだが、実はここには、人間と時間の関係をめぐる、ごく基本的な事実が示されているにすぎないとも言えるのではあるまいか。すなわち、線型的な時の流れの中で、人間は常にその流れの果てに位置する存在であり、十三歳の少女は十三歳なりに、時の流れの果てに立つて過去を振り返っているのだという基本的事実が、それである。そして、人間の時間のこうした基本構造は、十三歳の少女にとっても五十代のおとなにとっても、本質的に何ら変わりはないのである。そのような理解に立つとき、人の一生とは、結局のところ、終わりが始まりであり、始まりが終わりであるような瞬間の、永劫の反復と見ることもできるのである。人の生涯を織りなす時間のどの瞬間を取り出してみても、それは過去と未来のそれぞれの視座に應じて、起点と終点のどちらに意味づけることも可能な二重性を孕んでいるからである。

人生の旅立ちを迎えたばかりの少女が示す、時の形見のような廃墟への関心を、作品の冒頭に提示すること。あるいは、永遠の旅人としての遊女達の往還する深い闇、十三歳の少女のまなざしが見届けたその闇を、老残孤独の我が身を覆う闇と重ね合わせるように描くこと。——そうした表現を通じて、『更級日記』は、始まりと終わりがひとつであるような永劫回帰的時間構造を、鮮やかに描き出してみせたのである。

断片的叙述の積み重ねを通じて象徴的意味を開示するという、『更級日記』独自の方法は、人間の時間の二つの側面（無常迅速

な変化の相と永劫回帰的同一性」をともに描き出すという困難な試みにとつても、有効に機能し得たのである。⁽⁸⁾『更級日記』とは、五十余年に及ぶ生涯の時間を描きながら、人間の絶えざる変貌の過程と不変の自己同一性を同時に示すことに成功した、稀有な自伝作品だったのである。

註

- (1) 伊藤守幸『更級日記』における不在の「他者」、『日本文学』一九八八年四月。後に、加筆の上『更級日記研究』（新典社、一九九五年）に所収。
- (2) 引用は、秋山虔校注『更級日記』（新潮日本古典集成）による。
- (3) 三角洋一『更級日記 歌ことは』（『国文学』、一九八一年一月）。
- (4) 一九九八年度中古文学会秋季大会において、朽ちもせぬ……「歌を執筆時の創作とする視点を含む発表がなされたが、鈴木里香『更級日記』上洛の記が内包するもの」その叙述をめぐって、「そこで明確な論拠は示されなかった」。
- (5) 伊藤守幸『更級日記』と物語 孝標女の作家的視点をめぐって、『王朝女流日記の視界』に収録の上、新典社より近刊予定。
- (6) 河添房江『更級日記』（『日本文学研究の現状 古典』、有精堂、一九九二年）は、上洛の記に採録された三伝承（竹芝伝説、富士川伝説、真野の長者伝説）の反体制・反皇権的性格に注目している。物語憧憬や宮仕え願望から窺われる傾向と、これらの特異な伝承との関係は、一見二律背反的にも見えるが、こうした異質な記事群の併存こそが、『更級日記』を顕著に特徴づけているのである。それらの異質な記事群の關係に留意しながら、孝標女の精神の振幅を見定めて行くことは、『更級日記』研究の今後に残された課題である。

- (7) 三田村雅子『源氏物語 物語空間を読む』（筑摩書房、一九九七年）。

(8) 上洛の記に的を絞った本稿の考察では、「変化の相」には言及できなかったが、様々な「変化」が作品の表層に明示されていることは、ことさらな分析を試みるまでもなく、『更級日記』を一読すれば明らかである。

本稿は、一九九七年十月、The New Historicism and Japanese Literary Studies という全体テーマの下に、ミシガン大学で開催された会議（Midwest Association for Japanese Literary Studies 主催）において、「物語の方法と日記文学——『更級日記』を中心に——」と題して発表された原稿の一部に基づき、全面的な改稿を施したものである（発表原稿そのものは、Proceedings of MAJLS の第四巻に収録）。

私が参加したパネルの他の発表者は、アッコ・ウエダ（ミシガン大学）、ジェームズ・ライカート（スタンフォード大学）、アッコ・ササキ（ハーバード大学）、水村美苗（作家）の四氏であった。

当日の質疑を通じて貴重な意見をいただいた河添房江氏と、的確な司会によって議論を整理してくれた小森陽一氏に感謝したい。